



「波と鳥」 絵/文 白澤 恵舟

残暑もつかの間、海は荒れる日が多くなった。
波頭は白い閃光を放ち、命の糧を求めて海鳥達が風に逆らって競う。

千秋楽同期会

会長 菅原 三朗

われわれの同期会は戦争末期の昭和19年4月秋田中学に入学し、昭和25年3月秋田高校卒業という、人生の最も多感な青春時代に、わが国未曾有の大戦争・敗戦そして他国による占領の経験を共有し、実質6年間中高一貫校で机を並べた仲間の集団である。

しかもこの一同は戦争の何たるかを知り、校舎は占領軍に接収され、その後は劣悪な教育環境にもめげず県下第一の高校の榮譽を胸に、よき師に恵まれ運動に学業に大いに励み、友情の絆を育み深め、それぞれの道へと巣立って行った。その数274名である。

まさに国敗れて山河ありであったが、我が国には数千年にわたり培われてきた民族のすぐれた歴史と伝統文化があり、やがてその真価は疾風怒濤の如く到来する経済の高度成長時代を築きあげ、その担い手となったのがわれわれの世代であったろうと思う。

これらの士が、この嵐の時代を掻い潜り社会に頭角を現しはじめ、42歳の年祝いの同期会開催を契機に貴重な若き時代を思い

起こし、同志の今後の発展を願って語り合おうと同期会が結成された。

その同期会結成の音頭を取ってくれたのは、大友康二、渡部誠一郎、渡辺繁雄の3氏である。渡辺繁雄氏は成功を収めた「角繁」を背景に、この企画の実現に事務所から人材・資金の援助まで惜しまず提供されたと聞く。

以来、同期会はこの「角繁」の提供した事務所に活動の本拠を置く便宜を得、大友康二・渡部誠一郎という、活力旺盛な二人の知恵者が代表幹事となり卒業30周年以降、われわれの同期会は働き盛りの時から傘寿の今日まで、一年の休むこともなく毎年開催され今年で34回を数えるに至った。

同期会創設の立役者は前記の3人であるが、事務所が設置された後やがて私でよければと表れたのが、小林良弘・田中孝一と言う2人の気違い事務局である。この2人は寝てもさめてもアンテナを張り巡らし「事務局は戸籍係」との揶揄をものともせず「おれ達のような気違いも必要だ」とひたすら同期会の運営に尽力された。

これでわれわれの同期会も盤石の体制が整い、独特にして緻密で継続性のある類まれな存在となって今日に至っている。

どんな会や団体でもその盛衰の鍵を握るのは事務局次第である。毎年の「同期会のつどい」の発刊をはじめ、様々な事業・企画の継続など30有余年に亘る同期会の開催とその活躍の基本を支えてきたのは、まさに小林・田中の両事務局であり舌筆では盡し得ない大功労者である。

またこれまで発刊された「同期会のつどい」をはじめ、節目毎に発刊された「記念誌」等は日本の戦後史の生々しい集団の時代史と言ってもよい貴重な資料であり、是非適切な保存措置が取られるよう提案をしておきたい。

秋田高校卒業60周年、傘寿記念、そして千秋楽という、わが同期会最後の例会が9月18日秋田ビューホテルで開催される。現在の「通常会員」135名である。しかも「物故会員その他」も135名、この数字は偶然の一致かもしれない。しかし昭和の大恐慌のさなかに生をうけ、太平洋戦争から敗戦、突如の民主主義への180度の転換、同期会旗のシンボルそのままに「疾風怒濤」の大波に翻弄されてきた。千秋楽の同期会に果たして何名出席するだろうか、ついにその日がやってきた。

国交省所管事業に係る 22年度重点事業を要望



秋田県議会建設振興議員連盟（北林康司会長）と県協会では、8月2、3日の両日、脇雅史、佐藤信秋両参議院議員、県選出国会議員、国土交通省、同省東北地方整備局へ平成23年度の国交省所管事業に係る重点事業について要望を行った。

要望事項は次のとおり。

- 持続的成長が可能な地域社会形成に向けた公共基盤の整備について
- 環日本海地域との物流・交流を支える秋田港の整備促進について
- 地方の自立と発展を支える高速道路ネットワークのミッシングリンクの解消について
- 産業・生産を支える国道7号の整備促進

- 地方における航空ネットワークの維持について
- 生産基盤の確保に向けたダム建設工事の促進について
- 安全・安心の確保に向けた河川改修事業の促進について
- 県民の生命・財産を守る砂防事業等の促進について
- 海洋侵食対策の促進について
- 地域再生・都市再生に向けたまちづくり関連事業等の促進について
- 「生活排水処理事業」に関する交付金の一元化と制度の拡充について
- 追加の経済雇用対策の実施について
- 日本海東縁部における地震被害想定調査の早期実施について

秋田県

第31回秋田県優良工事表彰 工事39件に栄誉

第31回秋田県優良工事表彰式が8月20日、県庁正庁で行われた。

式の冒頭、佐竹敬久知事が「建設投資の縮減で厳しい状況だが、業界にはさまざまな場面で県民生活を支えてもらっている。県としても総合評価方式の拡大を更

に進めていく」とあいさつし、平成21年度に完成した県発注工事のうち、対象となる1,908件の中から技術力や施工管理などが特に優れた39件を表彰した。

また、今回で5回目の受賞となる(株)菅与組は特別表彰として表彰された。



技士会

優良工事従事の 会員技術者38名を表彰 秋田県土木施工管理技士会表彰

秋田県土木施工管理技士会（北林一成会長）は8月20日、秋田キャッスルホテルで表彰式を執り行い、技士会表彰規定により、優良工事に従事した会員の技術者（現場代理人）38名を表彰した。



県協会

高校生の入職促進 を目指す

小型車両系特別教育を実施



県協会では、建設雇用改善推進事業（入職促進事業）の一環として、建設系高校生の建設業への理解を深めるとともに、労働安全作業に必要な知識と技能を在学中に身につけることを目的に、小型車両系建設機械（機体重量3t未満のバックホーとホイールローダー）の技能資格取得のための講習を、高校生の夏休み期間中の7月22日から8月20日までの間の延べ12日間にわたり、「建設雇用改善助成金（(財)雇用・能力開発機構 所管）」を活用して実施した。

県内建設系高等学校10校中、初参加の鷹巣農林高校を含む8校から144名の生徒と5名の教員が参加。

事業創設2年目となる今年度は、学科では生徒・学校の負担軽減と利便性の向上を図るため新たに出勤講習を実施、防災防教育講習所で実施した実技については前年度の生徒の「運転操作の時間をもっとあればよい」との意見・要望に配慮し、参加生徒の条件を「将来にわたり建設業への入職を希望する者」に限定し、さらに少人数での参加校には合同での受講を促すなどの工夫を凝らし、学校・教員の協力により事故などもなく無事に終了した。

秋田水風景

文と写真/加藤隆悦

フリーカメラマン兼フリーライター
取材・執筆歴/旅の手帖、WoodyLife、ペンチャー・リンク、郷、あるる他
海外取材歴/ドイツ、アメリカ、ブラジル
写真塾・写案 主宰/写真教室、撮影ツアー企画等

Vol.16

千秋公園お堀

〔せんしゅうこうえんおほり〕
秋田市千秋明徳町



かつて、千秋公園（秋田市）のお堀には貸しボートが浮かび、親子連れや若者のカップルがボート遊びに興じていた。それがなぜ今は存在しないのだろうか、ふと考えてみた。「今どきボート遊びなど流行らない」とか、昔と違って人の流れが変わってしまったので利用者は期待できないだろう」とか、いろいろの推論は出来ると思う。それももつともだとは思わなければならない。たとえば、あれだけ娯楽の選択肢が多く、あとからあとから多様なレジャースポットが出てくる東京であつても、井の頭公園のボート場は相変わらず人気の行楽スポットであり続けている。水辺にのんびりとボートを浮かべて遊ぶという休日の過ごし方は、決して時代遅れではないのだ。

なったから貸しボートも必要なくなったのか、貸しボートのようなささやかな庶民の楽しみをなくしたから人が集まらなくなったのかと考えると、ヒヨコが先かタマゴが先かの議論になってきそうである。

井の頭公園では、しばしばフリーマーケットが開かれ、大道芸やストリートライブなども熱演し、それらを楽しみに多くの人が集まってきたという。にぎわいづくりとはそういうことなのではないだろうか。ほんとうに必要なのであれば大きな「ハコ」を新規につくるのも結構だが、一番大事なのは、「人々が集いたくなる場所づくり」なのだと思う。

人々が中央街区に戻ってきたら貸しボートを再開しようという発想ではなく、貸しボートの再開をにぎわい復活の呼び水にするような、そういう発想があってもいいのではないかと思うのだが。

秋田河川国道事務所

遠隔操縦式油圧ショベル 操作訓練講習会

8月25日、秋田河川国道事務所と東北技術事務所による「遠隔操縦式油圧ショベル操作訓練講習会」が雄物川河川敷（秋田市茨島地内）で開催され、県内建設企業からオペレータ13名が参加した。

この講習会は、近年の大規模地震、大雨等による土砂災害頻発を踏まえ、また、平成20年に発生した岩手・宮城内陸地震の教訓から有人機械施工が不可能な危険箇所での有用性が認められ、平成21年に東北地方整備局管内に災害対策用機械として配備された遠隔操縦式油圧ショベルのオペレータ育成・確保を図ることを目的に実施された。

講習は当日午前・午後の2回行われ、はじめ、東北技術事務所からショベルの概要説明、建機メーカー講師による運転・操作説明が行われた。続いての訓練では参加者が実際にリモコンを操作し、ショベルの始動から走行、掘削等の作業を目視とモニター確認のそれぞれのケースで行った。



（財）建設業福祉共済団から

建退共秋田県支部から

※上記の記事はホームページに掲載されています。

<http://www.a-kenkyo.or.jp>

旅する若者たち

永井登志樹

2ヵ月ほど前の7月中旬、秋田県との県境に近い青森県深浦町(旧岩崎村)の木蓮寺でJR五能線の風景写真を撮っていたら、「何を撮っているんですか」と声をかける人がいた。ふり向くと、大きなリュックを背負い日焼けした男性が、一段高い道路からこちらを見ている。ひと目見て徒歩旅行中の若者だとわかったので、私のほうが逆に興味をもっていろいろ聞いてみた。

名前はH君。故郷の群馬県の前橋を出発してから東北地方の福島、宮城、岩手、青森と北上、北海道をおよそ1ヵ月かけてめぐったのち再び本州に戻り、今は青森から秋田に向けて歩いているところだという。このあと日本海側を南下し関西へ。四国に渡ったあと九州を経て、最終の目的地は沖縄という。何事もなければ、旅が終わるのは5~6ヵ月先になるだろう、とのこと。

実は私も10代後半に、彼が歩いてきた北海道南部や津軽西海岸の道を、菅江真澄の旅の跡をたどって数十日かけ歩いたことがある。だから、彼のような若者を見ると親しみが湧き、他人のような気がしない。私に声をかけてくれたのも何かの縁かと思い、持っていたデジカメで彼の姿を撮り、握手をして別れた。

夏の季節に車を走らせていると、H君のような徒歩のほか、自転車、バイクなどで長距離旅行している若者たちをよく見かける。10代、20代には、私も同じように徒歩や自転車で旅をしていたので、彼らを目にするたびに若いころの感情がよみがえって懐かしい気持ちになる。そんな時は、当時お金がなかったのがヒッチハイクをよくしたことを思い出し、その恩返しというわけでもないが、ヒッチハイカーがいれば必ず乗せてあげよう、と思う。

ところが、そんな私なのに免許をとってからこれまで乗せたことがあるのはわずか2回だけで、ヒッチハイカーにほとんどお目にかかったことがないのである。

かつて60年代、70年代のころは、ヒッピー文化の影響もあって世界中でヒッチハイク旅行を試みる若者がいたが、現在は法令で禁止している国(本場のアメリカでは州)もあり、旅行の移動手段としては世界的に衰退しているようだ。

日本はもともと無銭旅行=ヒッチハイクの文化がなかったもので、定着する以前に衰退したともいえる。また、私自身ひんばんに幹線道路や高速道路(最近は高速のサービスエリアでヒッチハイキングすることが多い)を走っているわけではないので、ヒッチハイカーに出会う確率が少ないこともあるのかもしれない。

私が乗せた2人のヒッチハイカーのうち、ひとり外国人、もうひとは女性だった。

外国人は20代半ばくらいの若いドイツ人で、15年ほど前、秋田から男鹿へ向けて土崎の臨海道路を走っている時に、道端で親指を突き立てていた。このポーズは万国共通のヒッチハイクの意志表示だ。もちろん親指以外の人差し指や中指を立

てたら、国によっては大変なことになる。

彼を乗せたとき、ちょうどカーステレオでかけていたのが、ドイツ映画の『ベルリン天使の詩』(1987年/ヴィム・ベンダース監督)のサウンドトラックだった。偶然にしてはできすぎていると思われるだろうが、でも、嘘のようなホントの話である。

この映画は有名なので彼も知っていて、まさかこんなところでドイツ語を聞けると思わなかったのか、驚き喜んでくれた。映画で詩を朗読するペーター・ハントケという作家について話をしたかったが、お互い片言の英語ではうまく意志の疎通ができず、男鹿半島の南海岸の門前集落まで乗せ、そこで別れた。

日本を旅行中のドイツの若者が、せっかく男鹿まで来てくれたのにろくな案内もせず、交通量の少ない辺鄙な場所で降りしてしまった。今思えば、自宅に泊めるなどもっと親切にしてあげればよかったと後悔している。

もうひとりの女性のヒッチハイカーに乗せたのは10年ほど前のこと。彼女は早朝5時半ころ、秋田南インターチェンジの入り口に立っていた。その日、お昼に福島で取材の仕事があり、朝早く高速道路に乗ろうとした私の車に近づいてきて、東京まで乗せてくれという。

見れば、まだ高校生と思しき若い女の子ではないか。「福島までしか行かないか」と言うところを「それでもいい」と言って乗り込んできた。

ひと目のつかいない早朝、若い娘がインターチェンジで東京行きの車に乗せてもらうなんて、どう考えても家出としか思えない。それに見ず知らずの男の車に乗るなんて怖いもの知らずというか、大胆だとは思ったが、私は彼女のプライベートに立ち入る話はまったくせず、福島のサービスエリアまで乗せ、そこで降りてもらった。

彼女には次は運転手が男性ではなく、女性か夫婦の車を探して乗るようにとアドバイスしたが、それを見届けることなく別れた。今でも無事東京に着いたのか、その後どうなったのか、時々気になる。結果的に家出の手助けをしたことになるのだが、彼女とプライベートな話をしなかったのは、私には10代の娘を説教する度胸などハナからなかったということだと、今にして思える。

私にとって今のところたった2人のヒッチハイカー体験だが、どちらも映画のワンシーンのような、あまり現実味のない話で、ちょっぴり後味が悪い思いが残っているのが考えてみれば不思議だ。

ところで、秋田・青森県境で出会った徒歩旅行の若者H君は、今ごろどのあたりを歩いているのだろうか。別れ際に彼の写真を撮った時、私のブログに載せることを了解してもらった。群馬の親御さんや友人たちが万が一インターネットで見ることがあれば、元気な姿に安心するだろう。そして私のブログを見た人が彼をどこかで目にするのがあったら、励ましの声をかけてあげることもできるだろう。

彼とはまたどこかで会えるかもしれない。旅の幸運と無事を秋田から祈ることにしよう。